ウィルソン夫妻と灰の谷

都市と郊外の狭間を読む

高橋　美知子

はじめに

江頭氏の発表では、19 世紀末アメリカの都市を生きる人々が、都市と牧歌的世界の二者択一を迫られる様子の分析がなされたが、本発表では、郊外化現象が急速に進み始める 1920 年代の状況を切り取った作品として、スコット・フィッツジェラルドの *The Great Gatsby* (1925) を取り上げる。作品の主要舞台となっているのはニューヨーク近郊の郊外住宅地（イースト・エッグおよびウエスト・エッグ）とマンハッタンであるが、今回は二極化が進む都市と郊外の狭間に位置する「灰の谷」に注目したい。作中で “waste land”（27）とも言及されるこの場所は、しばしば T. S. エリオットの「荒地」に類する場所として、その象徴性が論じられてきた。今回は、都市と郊外の狭間の場所としての「灰の谷」の位置づけを確認しつつ、初期郊外化現象について考察していきたい。

1. 郊外化とその心理

アメリカの都市人口は 1920 年に初めて 50%を超えた。興味深いことには、それと並行して、「1920 年代以降では核心部やインナーエリアから郊外への［白人の］流出が激しく」なり、郊外化が本格化していく（大市大　64）。初期郊外化現象の主体である中・上流階級は、歴史上しばしばそうしてきたように「不適合者」を追放するのではなく、自ら都市から脱出することを選択した。郊外住宅地は、ハイデガーが言う「（都市的）脅威から身を守られ、保護される」（13）ための場所であり、マンザナスとベニートが看破するように「門を閉じ、自分たちを特例化する動き」（4）によって成り立っている。一方で、江頭氏の発表にもあったように、都市は「不適合者」や「無法者」が跋扈すると同時に、抗いがたい魅力を持つ場所として成立しており、そこから完全に離れ、郊外に引きこもることは不可能であった。かくして *The Great Gatsby* の主要登場人物たちは、仕事、娯楽、社交、情事、あるいは消費のためにマンハッタンへと足蹴しく通いながら、必ず閉ざされ、守られた郊外の住宅地へと戻っていく。一方で、閉鎖的な郊外文化の中で、週末ごとに開放的なパーティーを繰り広げるギャッツビー邸の異質さが際立っていることにも注目しておきたい。

2. 「灰の谷」―都市と郊外の狭間に

「灰の谷」も、都市と郊外の二項対立の構図に収まりきれない異質な場所である。「灰の谷」は、1939 年の万博までは巨大なゴミ投棄場であったフラッシングをモデルとしている。フラッシングは 1920 年代には郊外化と都市の成長の狭間に取り残されたエリアであり、ブルックリンの石炭炉からの大量の灰が捨てられる場所、ニューヨークがまい進する都市文化の澱を引き受ける場所であった。マンザナスとベニートは、「空間とは、常に『建設中』であり、常に『作られる途上』なのである。決して完成することはないし、決して閉じられることはない」（4）と述べている。閉じられた、安全な空間としての住宅地と、刺激や喧騒の場、モラルに反した行為さえも飲み込んでしまう雑多な空間としての都市を二分しようとする郊外化の試みの不完全さは、ニック、トム、ギャッツビーらが自宅とマンハッタンを行き来するときに必ず通る「灰の谷」という狭間の空間の存在により前景化される。さらに、「この辺りには、いつ来てもなんだか不安な気持ちになる」（118）というニックの言葉に表れるように、灰の谷が拡大して居住地に侵入してくるのではないかという漠然とした不安が、テクストからはにじみ出ている。

3. 高層化する都市―「市場という巨人たちのガラスの目」に映る欲望

マンハッタンの人口が 1910 年以降減少に転じる一方で、ニューヨーク中心部はブルックリンやブロンクスへと地理的に拡大していく。郊外化と中心部の拡大が同時進行的に進んでいく現象からは、平穏な郊外住宅地に足場を置いたうえで、都市の刺激を求めてやまない心理が伺えよう。この頃、マンハッタンでは高層ビル建築がラッシュを迎える。ヘンリー・ジェイムズはマンハッタンの高層ビルに「手段を問わない繁栄」への欲望を読み取り、ビルの外観に並ぶ窓を「市場という巨人たちのガラスの目」に例えた（77）。ジェイムズが看破する通り、欲望のメタファーである高層ビルがひしめくマンハッタンに、人間の欲望が集中していくのは当然であった。

都市における欲望が高まれば高まるほど、多くのビルが建ち、経済活動が盛んになるほど、産業廃棄物は増え、「灰の谷」は拡大する。増殖する市場の巨人たちの目が都市の空間を支配していく一方で、高層ビルが生み出した澱である灰は、都市と郊外の空白地帯に捨て置かれながら、じわじわと広がりその周囲を侵食していく。テクストににじむ「灰の谷」拡大への恐れは、登場人物たちの中に息づく欲望とも表裏一体である。欲望渦巻く場となった都心から身を引いて郊外に平穏な住居を構え、欲望を満たすためにだけ都心へ通おうとしても、欲望が拡大するほど、「灰の谷」も拡大し、完全な分断は不可能になる。*The Great Gatsby* の地理に潜むのは、このような状況である。

4. ジョージ・ウィルソンの物語――狭間の空間での生

ギャッツビーの物語の影に埋没し、テクストの表面に浮上してこない「灰の谷」の住人ジョージ・ウィルソンの物語を読み込むことで、都市と郊外の二項対立では捉えきれない郊外化の深層を探ることができるはずである。ウィルソンは、フォード社がデトロイト工場を設立したのと同じ 1910 年ごろに、「灰の谷」に自動車修理工場を開いている。単純労働者として都市で使い捨てにされる人生から逃れるために、ウィルソンがこの場所に活路を見出そうとしたのだとすれば、彼はこの地に、先進的業界の専門職人としての自活の夢を託していたと言えよう。マンハッタンに渦巻く欲望に比べれば、はるかにささやかであるものの、「灰の谷」にも資本主義的欲望が息づいていることに気づかされる。しかし、ウィルソンは 10 年強の間に資本主義の歯車として取り込まれ、現状から抜け出すこともできず摩耗しきっている。

また、妻マートルがトムの愛人となったことで、ウィルソン夫妻の夫婦関係は破たん直前だが、浮気が発覚した妻をアパートに閉じ込め、無理やり西部に連れていこうとするジョージの態度からは、彼が妻に対して抱く愛情のいびつさが浮き彫りになる。そのいびつさは、トムが妻デイジーに対して見せる態度にも通じる。すなわち、「灰の谷」に暮らすウィルソンの生活には、都市かつ資本主義社会における成功の夢の失墜と共に、一見平穏でモラルに則った郊外的家庭生活に潜む欺瞞もまた、見出すことができる。

都市と郊外双方の澱がよどむ「灰の谷」に住むジョージが、閉ざされているはずの郊外住宅地に入り込んで起こすギャッツビー射殺事件は、作品序盤で語られた、「灰の谷」の増殖・侵入の恐怖が具現化したような出来事である。しかし、この事件は郊外の安全性を脅かす事態にはつながらない。なぜなら殺されたのは郊外社会の異分子であるギャッツビーに過ぎず、郊外住人の心理に則って考えれば、この事件は異分子がよそ者によって都合よく排除されたに過ぎないからだ。それゆえジョージの死は、物語の中で徹底的な無関心で以って扱われる。時代に沿った職を手につけ、小さいながらも店を構え、一方的ながらも妻を愛し、働き通したジョージ・ウィルソンの物語は、その小市民的人生にそぐわない結末を迎えるが、そこに郊外化が内包するひずみの暴力的な噴出が見て取れる。しかし、その事実は誰にも顧みられることなく、ギャッツビーとニックの物語の狭間に押しやられていく。

まとめ

アメリカにおいて郊外が確立し始める時代を舞台とする *The Great Gatsby* には、すでに都市と郊外の狭間の空間「灰の谷」、およびそこに生きるジョージ・ウィルソンの描写を通じて、郊外化黎明期のアメリカが抱える様々な問題が描きこまれている。産業廃棄物の投棄場である「灰の谷」が拡大するという不安は、資本主義をまい進し、都市文化を謳歌するアメリカに蔓延する欲望と表裏一体である。しかし、そこにはまた、郊外が目指した理想的家庭生活の欺瞞もが息づいている。ニックをはじめとする郊外の住人たちが灰の谷に対して抱く「不安」の根幹には、まさしくそこが自身の中に潜む暗部が投影された場所だからということがあるだろう。「灰の谷」、“valley of ashes” には不定冠詞の “a” がつけられている（26）。これはとりもなおさず都市と郊外に挟まれた「灰の谷」が、各地にあり得ることを示唆しており、*The Great Gatsby* に描かれる郊外化をめぐる状況は、その後アメリカ各地へと広がっていくのである。

引用文献

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. Penguin Modern Classics, 1990.

Manzanas, Ana Mª, and Jesús Benito. *Occupying Space in American Literature and Culture*. Routledge, 2014.

大阪市立大学経済研究所編　『世界の大都市４　ニューヨーク』　東京大学出版会　1987

ハイデッガー、マルティン『ハイデッガーの建築論—建てる・住まう・考える』　中村貴志　訳・編　中央公論美術出版　2008